

杉
木
と
蔵。
。



Contents 目次

- 02 HISTORY
- 04 OUTLINE
- 06 MAP
- 08 PEOPLE
- 16 Q&A

朽木と蔵。

ようこそ、蔵の街とちぎへー
「蔵の街」と聞くと、誰しも蔵が並んでいる古い町並みを想像するだろう。けれども、そもそも蔵って何？ちょっと気にして歩いてみると、あっちにも蔵、こっちにも蔵。この建物も蔵？ひとつひとつ大きさや形が異なるし、漆喰で建てられているものや、石でできているものも。よく見ると、同じ形のものなんて無いみたい。「蔵って何？」という素朴な疑問を、朽木市の蔵の街を歩きながら紐といていきます。

巴波川沿いに佇む横山郷土館。対岸から眺めると、左右で少しずつ異なる石蔵、中心から少しずらした松。対称のようで非対称なところに、美しさがある。(Map 10)

川沿いに連なる塚田歴史伝説館の漆喰の建物と黒檜。塚田家は江戸時代後期から木材回漕問屋を営んでいた。当時、木材を運っていた船頭。今は観光客を乗せる。(Map 2)



蔵の街のなりたち

栃木駅で電車を降り、周りを見渡してみる。「おかしいな。古い建物が見当たらない…。」初めて来た人はそんな疑問を抱くかもしれない。それもそのはず、古い街道は駅から北に少し歩いたところにあり、古い建物はその街道沿いに残っている。駅から蔵の街大通りを歩いていくと五差路にあたる。この辺りから江戸時代、栃木宿として宿場町に定められた場所だ。真っ直ぐに抜ける道は『蔵の街大通り』と今は呼ばれるが、この道こそが日光例幣使街道。待ちに待った街道である。時代を遡ること1591年、この地を治めていた皆川広照は現在の城内町に栃木城を築き、栃木町はその城下町として成立、発展していった。しかし栃木城は1609年に廃城。その後、時を経て1617年に徳川家康が日光東照社に祀られ、1645年に東照宮となったのち、1646年から毎年、朝廷から日光へ例幣使という勅使（使者）が派遣されることになった。その際に例幣使が通った道が現在の日

光例幣使街道なのだ。街道の宿場町となったことで、町内では人と物の往来が盛んになった。なおこの街道、昔も今も道幅は変わらないという。街道に面して東西に長い地割になっており、いわゆる間口が狭く奥行きがある、という典型的な形。今でこそ街道に並行して道路ができたが、昔は街道から川まで直結した非常に長い地割だったのだ。それほど長い敷地がどんな空間だったのかというと、街道に面して見世蔵（店舗）、住居、中庭、土蔵（倉庫）が複数、祠があるのが一般的なつくり。蔵といっても、栃木には複数の種類が存在するが、詳しい話は後ほど。さて、栃木宿は今の万町交番まで続くが、街道はそこから進路を北西に変える。道幅は狭くなるが、ここから町の雰囲気少し変わる。嘉右衛門町伝統的建造物群保存地区。2012年に文化庁より選定を受けた、栃木県で唯一の町並み保存地区である。栃木市の蔵散策では、この地域も外さず見てほしい。

しゅう うん

舟運で栄えた栃木市の歴史

漆喰の蔵が並び、穏やかな川が流れ、船頭さんのいる小舟が浮かんでいる。栃木県栃木市の象徴的な景色だ。栃木市で必ず訪れる観光名所となっているが、この景色は江戸時代からそう大きくは変わらない。

栃木市の街の中心部を流れるこの川は巴波川と呼ばれる。川の名の由来は「昔は水量が多く、巴のような渦を巻き、波を立てて流れていたため」など言われている。江戸時代、商人たちはこの川を3日間かけて江戸まで下り、栃木の名産である木材、薪炭、麻、石灰、農産物、瓦などを売り、江戸で塩、海産物、油、黒砂糖などを購入し、川を上って戻ってきた。江戸で仕入れた品を売ること、栃木町はどんどん栄え、賑わっていった。

江戸で購入してきた荷物は、河岸という荷揚げ場から引き揚げられた。1616~1617年の日光東照社（1645年に東照宮となる）造営の際に使われた御用荷物に関係した荷揚げが起源とされている。（なお、

栃木から日光までは陸路で運ばれた。）街の中心部には栃木河岸（今の幸来橋付近で巴波川の東側）、片柳河岸（巴波川の西側、現在の市役所から少し北に平柳河岸があり、総称して栃木河岸と呼ばれていた。現在、唯一現存する平柳河岸が嘉右衛門町伝建地区内（泉町）の川沿いで見ることが出来る。道は狭いが今もこの両岸には歩道があり、江戸時代にここで荷揚げをしていたと想像するとなんとも感慨深い。

「栃木町は物の集散地」と言われたが、川は舟運遊行の終点としてここで全て荷揚げされ、陸には街道があるという点で運輸・交通の重要な地であったことがわかる。多くの人と物がこの町で行き来し、賑わったことが想像できる。

こうして運ばれてきた物資や商売で使う大切な品々を保管していたのが、蔵である。栃木の繁栄の象徴ともいえる蔵。今もこの街に残る蔵を眺めながら、蔵について学んでいこう。

蔵の種類

江戸末期、栃木宿は4度の大火に見舞われた。焼け残った土蔵の耐火性が評価され、蔵造りの建物が増えていった。現在、主に3種類の蔵を見ることができる。



見世蔵

参考蔵：大貫定衛商店 [Map 13](#)

通りに面した店舗を土蔵づくりとした建物で、防火や耐火性の高さから関東を中心に流行した形式。正面から出入りするため、通りに面して土間（土足のまま歩ける場）がある。1階は店舗、2階を座敷として使用していたものが多い。外壁は主に黒や白の漆喰仕上げ。見世蔵は関東で流行した独特な造り。関西に寄るにつれ壁厚は薄くなり、隣家からの延焼対策として卯建が付く。



土蔵

参考蔵：油伝味噌 [Map 18](#)

昔の地割は間口が狭く奥行があり、見世蔵、居住部分、中庭、土蔵という順に並んでいた。土蔵は、敷地の奥に構える倉庫の役割。文書などを入れておく土蔵は「文庫蔵」と呼ばれ、保管するものの名称が付けられていたものも。外壁は主に白の漆喰仕上げ。土蔵にも2つのタイプがあり、壁から屋根までが一体になっているものと、屋根が別の造りで「置き屋根」と呼ばれるものがある。



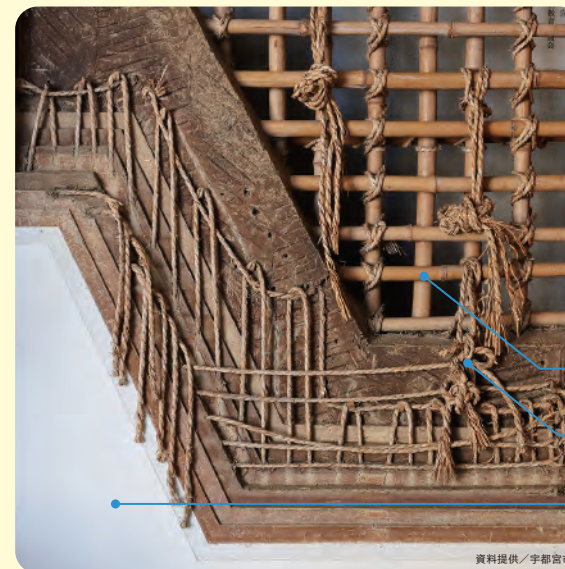
石蔵

参考蔵：横山郷土館 [Map 10](#)

多くは地場で採掘された石を積み重ねて造られた倉庫。栃木県内では岩舟石（栃木市）、大谷石（宇都宮市）、深岩石（鹿沼市）が代表的。大谷石と深岩石は見た目や質感は似ているが、ミソと呼ばれる斑点が大谷石は茶色で深岩石は黒色なのが特徴。壁は大谷石でも基礎を見ると頑丈な岩舟石を使っていたりするので、ひとつの石蔵で何種類の石が使われているか見るのもおもしろい。

構造と名称

蔵の壁は何でできているのか。蔵の断面はどうなっているのか。真っ白な美しい外観からは想像がつかない、壁の内部を解説します。蔵の構造から各部の名称まで説明できたら、一目置かれるかも。



土蔵の壁は、まず縦と横に竹を組み（竹小舞）、交差部分をすべて荒縄で結ぶ。そこに藁を練り込んで作った土を塗っていく。最初はやや厚めに塗り、乾いたらまた塗る、を繰り返す。土を塗り終わったら、砂を混ぜた砂漆喰を塗る。ザラとした質感で、イメージする漆喰ほど白くはない。砂漆喰が乾いたら、仕上げに漆喰を塗って完成。

竹小舞

荒縄

漆喰

資料提供 / 宇都宮市



保存修理の手順

蔵は丁寧に解体され、使える材は保管して再利用される

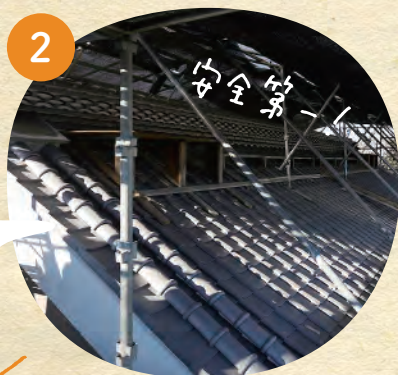
※伝建地区、特定物件（昭和20年頃までに建てられ、歴史的建築物と認定されたもの）の場合



1

どお？
うん

建築士が現状の図面を作成し、その後大工と共に修理方法を検討する（約1年）。大工により手作業で解体を開始。使える材は再利用するため、梁や柱には全て番号をふり、保管する。



2

大工が基礎、柱、梁等の構造部の修繕を行う。瓦職人が屋根に瓦を葺き、まず屋根部分を完成させる。



3

壁の下地となる竹小舞を縦横に組んでいく。竹小舞が崩れないよう、交わる部分全てを左官職人が荒縄で結ぶ。

4



左官職人が竹小舞の上に、薬を入れて寝かせた土をつけていく。乾いたらまた新たな土をのせ…を繰り返す。土の層がおおよそ20cm以上(7~8寸)になったら漆喰を塗り仕上げる。



蔵と職人

街を歩いていると、古い蔵もあれば、真新しい綺麗な蔵もある。栃木市には蔵を修理できる職人たちがいる。今もなお、多くの蔵が残るのは職人がいるから、というのも理由のひとつ。蔵の街は、職人の街でもある。



田村英敏 (たむらひでとし)

大工。専門学校卒業後、建設業に就職。その後、父が営む「有限会社田村建築」で学ぶ。現在は代表取締役。NPO法人とちぎ蔵の街職人塾のメンバー。佐藤さんは専門学校の先輩。

佐藤大介 (さとうだいすけ)

建築士。専門学校卒業後、設計事務所勤務。2009年「創右衛門一級建築士事務所」を設立。NPO法人とちぎ蔵の街職人塾のメンバー。栃木県建築士会で田村さんと出会う。

100年後に残る仕事をする

嘉右衛門町伝建地区で、ペアを組んで蔵の保存修理を行っている建築士の佐藤大介さんと大工の田村英敏さんに話を伺いました。

蔵の修理における建築士と大工の仕事の一連の流れを教えてください

佐藤 まずは二人で蔵に入り、調査をします。高い所に登ったり、一部を壊して状況を確認したりするのは大工でないといけないので、二人で現場を確認しながら図面を作成します。設計書ができれば工事金額を算出し、建築士が補助金申請などの手続きをします。金額、工事期間など施主と話し合い契約に至る。ここまでの1年ほどかかります。

田村 着工したら、解体できる所まで解体し、足場を組んで素屋根を掛けます。基礎石を直して、柱や梁などの骨組を修理し、屋根を作り、ここから左官屋さんにも入ってもらって竹小舞を組み、荒縄で編んで、土を塗って、漆喰を塗って仕上げて…という流れですね。

着工したら、建築士の出番はあるのでしょうか？

佐藤 作業は職人さんメインになりますが、図面通りにできているか随時確認するのは建築士の仕事なので、ずっと関わってはいますね。

嘉右衛門町で大掛かりな蔵の保存修理に取り組まれています。いつから蔵の修理に携わるようになったのですか？

田村 今着手している岡田記念館の蔵が初めての蔵修理で。調査記録を見返したらちょうど10年前でした！

佐藤 ちょうど10年の節目なのか！当時は二人とも30代で、新たな挑戦でしたね。

田村 修理する蔵が3棟あり、若手の職人たちに声がかかって挑戦する機会をもらえたんです。その時に佐

藤さんと組んで、着手することになりました。

佐藤 ペアを組むことで、お互いのできることを補い合えるので、仕事を進めて行く上でとても良かったです。

初めて蔵修理を手掛けたときの苦労話が聞きたいです (笑)

田村 もう苦労しなかった (苦笑)。まず古い建物の専門用語がわからない。何から手をつけていいかもわからない。まずは全解体しました。解体は手作業なので、逆算して直していけば良いと考えて。全解体することで構造がわかりました。

佐藤 全解体であることがむしろ良かったです。保存修理は半解体がほとんどで、全解体は稀なんです。たまたま最初が全解体だったから、一から直す方法を知ることができた。

田村 全てが大変だったけれど、何といっても観音扉の修理がとにかく一番苦労しましたね。扉って普段簡単に開け閉めしているけれど、縦も横も斜めも全方向が揃っていないと閉めた時にピタッと合わないんです。開けるときはスッと開いたまま止まり、閉めるときもスッと閉まって勝手に開かないようにする。ピタッと揃って閉まるよう、本当に僅かな傾斜をつけています。研究に研究を重ねて、最後に設置する時は一発勝負。見事、計算通りにいった時はガッツポーズでしたね。

現在、2棟目の蔵修理に着手されていますが、1棟目の時と気持ちの変化はありますか？

佐藤・田村 もうね、全然違いますよ！！ (笑)

田村 修理の仕方がわかっているから、気持ちの面では全然違います。ただ2棟目は全解体ではないので、初めて経験することもたくさんあります。

佐藤 2棟目だからこそ新たな挑戦もしています。できるだけ解体を最小限にして、どこまで部材を再利用できるかチャレンジしていますね。

田村 1棟目で全解体した時に、ばらすと、拘束が解かれ大きく曲がり出す材があるんです。曲がったものを直すのに本当に苦労したので、2棟目はそうならないよう工夫しています。

蔵の修理と言っても、同じものは一つもないです

んね。それぞれの蔵から学ぶことは多いですか。

佐藤 田村君は、材木の削り方でどの大工の仕事か見分けがつくようになったそうですよ。

田村 蔵を解体することで、建築当時の大工の技が見えるんですけど、だんだんと「この蔵を造った大工さんは腕がいいな」「ここは造りが荒いな」とかが分かってきました。

佐藤 違う家の蔵でも「この蔵は凄い！」と思ったら同じ大工が造っていたとか。大工の苗字が同じだからおそらく子孫だと思うけど、技術レベルが全然違うとか。田村君はそういうことも分かるんです。もう変人…いや、本当に素晴らしい職人です！ (笑)

最後に、今の仕事のやりがいについてお聞かせください

佐藤 修理していると、現代的な直し方をしなければならぬ場合もあって、完全に元通りにできないこともあるんです。でも「元々はこうだったよ」という履歴を残す必要はあって。もしかしたら、100年後にまた修理をする際に、江戸時代と同じ形に戻せるかもしれないじゃないですか。そのために、調査履歴保存というのをしっかりやっておくのが、建築士の役割だなど。これは一般住宅においては無い仕事なので、蔵の仕事だからこそできることですね。

田村 江戸時代の大工のことが、こうやって令和の時代に語られるんですよ。大工の仕事というのは、建物を残すことで歴史的背景や文化を未来に受け継いでいく仕事だと思います。僕の想いは、建物で語り継いでいきたいですね。

佐藤 100年後と一緒に名前を残せるよう、良い仕事しようね。



昔の大工道具は手に入りにくいので、自作することもあるという田村さん。作業机には大工道具にまつわる書籍が。



栃木正和 (とちぎまさかず)

有限会社栃木左官店の4代目。一級左官技能士。24歳の時に父が代表を務める有限会社栃木左官店に入り、左官の道へ。NPO法人とちぎ蔵の街職人塾のメンバー。趣味は道の駅巡り。

蔵づくりになくはない存在、左官職人

「蔵づくりにおける左官の仕事は、季節ごとに行うことが決まっています。寒い時期は外壁の漆喰を塗ると凍ることもあるので、今は気温差の影響を受けにくい内部の作業や、窓枠や水切りといった装飾の下地をつくっています」。そう語るのは、左官職人の栃木正和さん。

蔵づくりにおける左官職人の仕事は、土づくりから始まる。荒木田土という粘土質の土に“スサ”と呼ばれる稲藁を刻んだものを入れ、半年間寝かせて馴染ませたら完成。土づくりは春と秋に行う。春に仕込む土は、夏の間寝かせて秋に塗る。秋に仕込む土は、冬の間寝かせて翌春に塗る。気候と作業の進捗を読みながら、仕事の段取りを進める。予測と経験が求められる仕事だ。

栃木さんは左官業を営む父のもとで育ち、いずれ跡を継ぐと考えてはいたものの、大学卒業後、一般企業に就職した。「大学では工業化学を学び、無機材料（漆喰）が卒論のテーマでした。当時は将来の仕事で活かそうと考えていた訳ではなく（笑）単純にそういう勉強が好きだったんです」と笑う。そんな話を聞いたからか、栃木さんが仕込む土や漆喰は、配合や仕込み具合が計算し尽くされた特別なものに見える。

左官の仕事に就いたのは24歳の時。多くの現場で経験を積み、40歳手前で現場での責任を担うようになった。当初は工場などの現場が多かったが、2006年に蔵の勉強会に参加したことがきっかけで、蔵の仕

事が増えたという。

蔵づくりの手順として、まず大工が柱を建て、瓦屋が屋根を葺く。その後、壁をつくるための土台として縦横に細い竹を組むところからが左官職人の出番。土を何層も重ね、漆喰塗りは最後の工程。栃木の蔵の場合、壁の厚さは20cmほどのため、漆喰を含めて外側は7工程、内側は5～6工程の作業となる。なお、全国的に見て壁がより厚い地域では、工程も増える。

かなりの期間、ひとつの蔵に張り付くこととなる左官職人にとって、蔵修理を終えた時の達成感はひとしおだろう。

「足場を外した時に、青空だと真っ白な蔵が本当に美しくて。良い仕事ができたと、とても気持ち良く見ていただけるんだよね」と語る栃木さん。

蔵の写真撮る時に、青空と蔵のコントラストは美しく映えるので、思わず大きく頷いてしまう。

「これからも、見た人が息を飲むような建物に仕上げたい。建物を見るために栃木を訪ねてくれる人が増えたら嬉しいし、若い世代が『どうやって塗っているんですか？』と聞きに来てくれるような、そんな仕事をしていきたいですね」。

自分の技術を存分に見せることができる左官業は、蔵づくりにおける花形だ。「自分もこんな仕事がしたい」。栃木の蔵を通じて、誰かの琴線に触れることができれば嬉しい。





NPO 法人とちぎ

蔵の街職人塾

2011年（平成23年）設立。2019年にNPO法人となり、2020年には栃木市の「歴史的風致維持向上支援法人」の指定を受けた。現在、会員は30代～80代。建築士・職人になりたての若い人たちや、職人でなくとも興味がある人は大歓迎。



蔵をなおす、つくる、まもる

栃木市が蔵の街と呼ばれる理由は、江戸・明治期を含め 100 年以上前に建てられた蔵が多数残っているから。とはいえ、頑丈な蔵も時の流れで劣化し、瓦が崩れたり、漆喰が剥がれたりして損傷する。栃木市の強みは、その都度修理できる職人がいるということ。蔵の修理には様々な分野での職人が関わる。小規模の損傷であれば瓦屋、左官屋といったところだが、ポロポロの蔵を一から直すとなると、建築士・大工も登場する。とちぎ蔵の街職人塾は、歴史的建造物の保全や若手職人の育成を目的に 2011 年に設立された。メンバーは先ほどの専門家に加え、材木屋・板金屋・電気屋・元市職員・大学教授なども加わる。2019 年には NPO 法人となり、職人だけでなく、一般市民への伝統建築に関する理解・興味を深めるための活動も行っている。職人の活動団体というのは珍しい。なぜなら、全国各地に職人はいても、まとめられるリーダー的存在は

なかなかいないからだ。蔵の修理ができる職人は全国的に減っているが、昨今の災害等もあり、修理を求める声は各地から挙がっている。そのような時、個々の職人をまとめ、現場を仕切れるリーダーがいなければ、地域全体での修理は難しい。日本の歴史的建造物を保存していく上で、リーダーの育成や技術の継承が非常に重要だ。職人塾は、30 代～80 代までの職人たちが在籍しており、若手職人も歴史的建造物の調査や修理に携わる。わからないことがあっても、いつでもベテランに相談ができる環境がここにはある。2022 年から所属している建築士の羽部律子さんは「同業の建築士や職人とも気軽に情報交換できるのがありがたい。日々、職人塾の皆さんから学ばせてもらっています」と語る。蔵の街であり続けるために、今日も栃木の職人たちは仕事に取り組んでいる。



みんなのQ&A

栃木市に住んでいる方や観光で来られた方に、蔵や町並みにまつわる素朴な疑問を挙げてもらいました。

Q1 蔵の街には何棟の蔵があるの？

A 蔵の街大通り周辺と嘉右衛門町伝建地区で約200棟の蔵が現存している。(2025年8月時点)

Q2 蔵を造るにはどれくらいの年月がかかるもの？

A 保存修理の場合、大きさにもよるが土蔵で3年くらいかかる。

Q3 現在の「蔵」と「倉」の違いはある？

A 蔵は大切なものを保管する場所、倉は倉庫的な意味合いが強い。

Q4 土蔵は何年くらいもつ？(耐久年数は？)

A 屋根がしっかり造ってあれば100年以上は普通にもつ。壁は漆喰で仕上げ、更に下見板を張ればより長くもつ。



Q5 蔵の温度や湿度はどれくらい？

A 蔵の造りにもよるため一概には言えないが、一年を通して一定に保たれている。

Q6 蔵に虫やネズミが入らない工夫は？

A 蔵の入り口に板を立てたり、土蔵の壁の真ん中辺りに「鼠返し」という、そり返った縁がある場合も。

Q7 これだけ蔵があるということは、歴史に名を馳せた職人(棟梁、左官職人、瓦職人)がいたのか？

A いました。解体すると棟札というのが出てきて、当時数年待ちと言われた人気が棟梁の名前をよく見かける。



Q8 栃木市は蔵を造るための材料が手に入りやすいの？

A 市内を流れる永野川沿いで良質な土が取れたため、昔は30軒ほどの瓦屋があったと言われ、今でも瓦屋が残る。瓦は重いため土が取れる所で作られるものだった。

Q9 土壁の土ってどんな土？

A 昔は畑から土を掘り起こして作ったが、今は荒木田土という粘土質の土にスサ(稲藁)を入れ、2ヶ月~半年程寝かせて土を作る。壁の土台となる厚みがある層がある層は5cmほどのスサを入れ、土を重ねると細かいスサを入れる。表面近くなったら砂も混ぜる。



Q10 土壁の土を塗る時期は決まっている？

A 春の終わりに土を作り、夏の間発酵させて、秋に塗る。秋に作る時は発酵が遅いので、冬の間寝かせて、春に塗る。

Q11 蔵の梁に使われる木材の種類は決まっていますか？

A 土台は栗(硬く、腐りにくく、シロアリにも強い)、柱は杉(柔らかい)、梁は松(曲げの力に強い)が使われることが多い。それぞれ木の特性を活かした場所に使われる。建築材には向かないが、火除けの願掛けとして一部に水木が使われていることが多い。



Q12 漆喰を塗る時期は決まっている？

A 春から秋(地域によって10月末~11月末まで)。寒いと凍ってしまうので、冬は塗らない。

Q13 屋根の高さや鬼瓦・影盛の大きさでお金持ちの度合いがわかったって本当？

A 影盛は大きければ大きいほどお金をかけられたということ。それだけの重さに耐えうる屋根にするにもお金がかかる。

Q14 瓦の先端についている渦巻きのような模様はどんな意味があるの？

A 三つ巴と言われ、水の渦を模しているため防火(火災から守る)のためのおまじないのような意味が込められている。



Q15 漆喰って何でできているの？

A 消石灰、スサ、角又(海藻を煮て粘り気を出した糊)、水を混ぜて練る。漆喰の前工程として、砂漆喰を塗るが、その時は砂も混ぜる。



電車で

- 浅草駅から「東武スカイツリーライン・日光線特急」で栃木駅まで70分
- 新宿駅から「JR・東武日光線特急」で栃木駅まで75分
- 東京駅から「上野東京ライン」で栗橋駅まで55分→「東武日光線」に乗り換え栃木駅まで30分

車で

- 栃木インターから蔵の街まで約3km

あわせてもっておきたい観光案内。



『PoPoPo』

蔵の街エリアの個人店を紹介したmap。歩いて散策することでお気に入りのお店を見つけたいという想いから、PoPoPo(歩歩歩)と名付けました。



『蔵と街』

蔵の街エリアの古い蔵を紹介したmap。建物の年代や昔の商売など、その建物のストーリーを少しだけ知ることができる。蔵巡りがもっと楽しくなるアイテム。

栃木と蔵。 2026年3月発行(第1版)
文：遠藤百合子
写真：アラタケンジ
AD・デザイン・イラスト：清水将司
発行元：
NPO法人嘉右衛門町伝建地区まちづくり協議会

※この冊子に掲載されている情報は2026年3月現在のものです。予告なく内容の変更があり得ることをご了承ください※本誌の無断複写・複製・引用を禁じます。



嘉石衛門町
ガイドンセンター
五建地区
石衛門町
ガイドンセンター
五建地区
石衛門町

